

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	柿木 寛明
<p>[ 論文題名 ]  <b>Risk factors for uroseptic shock in patients with urolithiasis-related acute pyelonephritis</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Urologia Internationalis, 100, 37-42, 2018</b></p> <p>著者名  柿木寛明 東武昇平 柿木優佳 有働和馬 魚住二郎 野口満</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b> 結石性腎盂腎炎の患者が敗血症性ショックに至るリスク因子を分析した。  <b>【方法】</b> 2005年1月から2012年12月の期間に結石性腎盂腎炎により当院で入院加療を行った69人の患者(女性41人、男性28人)を対象とし、敗血症性ショックに至るリスク因子を、後方視的に分析した。<b>【結果】</b> 尿管ステントもしくは腎瘻によるドレナージが62例に行われた。敗血症で昇圧剤を必要としたのは25例で、昇圧剤を必要としなかった群に比べ、血清アルブミンが有意に低く、CRP値が有意に高かった。多変量解析でも血清アルブミン値とCRP値は敗血症性ショックの有意なリスク因子だった。<b>【考察】</b> 結石性腎盂腎炎患者における血清アルブミンの低下は、発症前の低栄養状態のみを反映しているわけではなく、菌血症が引き起こす全身的炎症反応による、蛋白質の代謝・血管外への漏出・血管透過性の亢進を反映していると考えられた。<b>【結論】</b> 血清アルブミン値は結石性腎盂腎炎患者が敗血症性ショックに至る有意なリスク因子であり、血清アルブミン低値を呈する結石性腎盂腎炎症例では、尿路閉塞に対する迅速なドレナージを行うことが望ましい。</p>			

- 備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	山本 忍
<p>[ 論文題名 ]  Concentration determination of urinary metabolites of <i>N,N</i>-dimethylacetamide by high-performance liquid chromatography-tandem mass spectrometry</p> <p>Journal of Occupational Health, Epub ahead of print</p> <p>Shinobu Yamamoto, Akiko Matsumoto, Yuko Yui, Shota Miyazaki, Shinji Kumagai, Hajime Hori, and Masayoshi Ichiba</p>				
<p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b> ラットにおいて発がん性が確認され、がん原性指針に追加された <i>N,N</i>-ジメチルアセトアミド(DMAC)は、産業界で溶媒等として広く使用されている。DMACは皮膚吸収も指摘されており、取扱い作業者のばく露評価には体内取り込み量が分かる生物学モニタリングが有効である。しかし、日本においては基準値もなく生物学的モニタリング手法は確立されていない。したがって、DMACの尿中代謝物4成分の同時測定法を開発した。</p> <p><b>【方法】</b> 測定対象成分は、DMAC、N-ヒドロキシメチル-N-メチルアセトアミド、N-メチルアセトアミド、S-(アセトアミドメチル)メルカプツール酸の4成分とした。高速液体クロマトグラフ-質量分析計を用い、分析条件および測定精度を検討した。</p> <p><b>【結果および考察】</b> 尿を移動相で10倍希釈し1<math>\mu</math>L注入した。イオン化法はESI法とした。分析カラムはC18の逆相ODSカラムが分離良好で、移動相は10 mMギ酸とメタノールのグラジエント条件とした。本法での定量下限は最大0.05 mg/L、測定法の真度は96.5-109.6%、精度は3.43-10.31%と良好な結果が得られた。</p> <p>従来から用いられていた分析法であるガスクロマトグラ法は試料注入口の温度で代謝物が熱分解することからその精度は低いことが指摘されていた。本手法はこの問題を解決した方法である。</p> <p><b>【結論】</b> 開発された方法はDMACおよびその代謝物を低濃度まで精度良く測定できる方法を開発した。本方法は、DMACのばく露評価を行う際に活用できる。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	池邊 智史
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>題 名 Total hip arthroplasty following Girdlestone arthroplasty</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Journal of Orthopaedic Science (Epub Ahead of print) 2018</p> <p>著者名 Satoshi Ikebe, Motoki Sonohata*, Masaru Kitajima, Shunsuke Kawano, Masaaki Mawatari</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【研究の目的】化膿性股関節炎 (SA) および、人工股関節全置換術 (THA)、人工骨頭挿入術 (BHA) 後感染に対する切除関節形成術 (GA) は、感染制御という点では有効な手術であるが、その後のQOLは満足のものではない。しかし、GA 後症例に対する THA は難易度が高く、股関節外科分野における挑戦的手術の一つである。そのため、GA 後症例に対する THA に関する成績の報告は少ない。また GA の対象となる、SA と THA、BHA 後感染は病態が大きく異なるが、両者を比較した報告もない。今回、上記2群について GA 後の THA の成績を調査・比較検討した。</p> <p>【方法】19例19股 (SA 群12股、infected THA,BHA 群7股) について後ろ向きに調査した。</p> <p>【結果】Japanese Orthopaedic Association(JOA) hip score は術前後で比較し、平均50点から80点と有意に改善していた。術中、術後合併症は11股に生じ、術中骨折1股、深部感染6股、脱臼7股、カップの弛み1股であった。感染はinfected THA,BHA 群で5股あり、SA 群の1股に対して有意に高率であった。</p> <p>【考察】GA 後症例に対する THA の臨床成績は比較的良好であったが、感染の再燃を中心としていくつかの合併症も認められた。また、infected THA,BHA 群では術後 JOA hip score が SA 群に比して有意に低く、THA 後の感染率が SA 群に比して有意に高いことも明らかとなった。</p> <p>【結論】GA 後 THA の感染リスクは31.6%と高かったが、最終的に94.7%の症例で感染鎮静化、人工関節温存が得られていた。GA 後症例に対する THA は患者 QOL の改善に有効な術式であるが、infected THA,BHA 群では感染の再燃に最大限の注意を払う必要がある。抗生剤含有セメントモールドを用いた二次的再置換、抗菌インプラント、関節周囲感染バイオマーカーを併用することで今後さらに良好な QOL を獲得できると考えた。</p>			
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏 名	原口 祥典
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Donepezil suppresses intracellular Ca<sup>2+</sup> mobilization through the PI3K pathway in rodent microglia</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Neuroinflammation, 14,258,2017</p> <p>著者名 原口祥典, 溝口義人, 扇谷昌宏, 今村義臣, 村川徹, 鍋田紘美, 立石洋, 加藤隆弘, 門司晃</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>目的:</b> アルツハイマー病 (AD) では、脳内ミクログリアを介した神経炎症が関与すると言われており、炎症性サイトカインあるいは NO(nitric oxide) 放出などのミクログリア機能にとって細胞内 Ca<sup>2+</sup> 動態が重要である。今回、主要な認知症治療薬で、アセチルコリンエステラーゼ阻害剤であるドネペジル (donepezil) がミクログリア細胞にどのように作用するか、その作用機序を調べた。</p> <p><b>方法:</b> 細胞内 Ca<sup>2+</sup> イメージング、NO イメージングを用いて、ドネペジルによる前処置後の、細胞内 Ca<sup>2+</sup> 動態調べる。また、フローサイトメトリーを用いて、ドネペジルによるミクログリアの貪食能へ効果を検討する。</p> <p><b>結果:</b> ドネペジルを前処置後、ラット由来 HAPI 細胞およびマウス由来初代培養ミクログリア細胞において、TNF<math>\alpha</math> 投与後細胞内 Ca<sup>2+</sup> 濃度上昇が抑制され、その細胞内機序として PI3K (Phosphoinositide 3-kinase) 系活性化が関与すると示唆された。DAF-2 イメージングにより、ドネペジルは TNF<math>\alpha</math> によって誘発される NO の産生も抑制した。その経路として PI3K 経路が関与した。貪食能についても、ドネペジルは PI3K を介してミクログリアの貪食能を促進した。</p> <p><b>考察:</b> ドネペジルは PI3K 系を介してミクログリア細胞内 Ca<sup>2+</sup> 動態および貪食能を制御し、ミクログリアを介して脳保護的に作用する可能性が示唆された。</p> <p><b>結論:</b> 今回の結果は、ドネペジルが PI3K 系を介して脳内ミクログリア細胞機能を直接制御する可能性を示唆している。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	倉田 毅
<p>[ 論文題名 ] Physiological and pathological clinical conditions and light scattering in brain</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Scientific reports, 6/31354, 2016</p> <p>著者名 Tsuyoshi Kurata, MD; Sachiko Iwata, MD, PhD; Kennosuke Tsuda, MD, PhD; Masahiro Kinoshita, MD; Mamoru Saikusa, MD; Naoko Hara, MD; Motoki Oda, MSc, PhD; Etsuko Ohmae, MSc; Yuko Araki, PhD; Takashi Sugioka, MD, PhD; Sachio Takashima, MD, PhD; Osuke Iwata, MD, PhD.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的 近赤外線分光法は非侵襲的に脳の代謝を計測する方法で、新生児での評価にも適用される。その換算散乱係数 (<math>\mu s'</math>) は生理的成熟だけでなく、病的な脳の微細構築の変化も反映すると考えられる。本研究の目的は、新生児において <math>\mu s'</math> と関連する内的、外的要因を探索することである。</p> <p>方法 2011年2月から2012年11月までに入院した出生7日以内の新生児60名を対象とした。測定はTR-NIRS(Time resolved Near-infrared spectroscopy, 近赤外線時間分解分光法)を用いた。児の頭部4カ所に対して各々10分間測定した。1)産前の母子に関する情報(ステロイド投与の有無、帝王切開の有無など)、2)出産時および入院時の情報(児のApgarスコアなど)、3)測定時の情報(測定時の児の状態)について、<math>\mu s'</math> との関連を検討した。</p> <p>結果 単変量解析では、内的要因(妊娠週数、児の頭囲)及び外的要因(出産前糖質コルチコイド投与、緊急帝王切開術、児の人工呼吸器使用、アプガースコア、臍帯血血液ガスのpHと<math>PO_2</math>、測定時の児の血液ガスの<math>HCO_3^-</math>)が<math>\mu s'</math> と関連した。多変量解析では、妊娠週数、児の人工呼吸器使用、測定時の児の血液ガスの<math>HCO_3^-</math>が関連した。</p> <p>考察 <math>\mu s'</math> と関連する要因の中に病的な状況と関連するものがみられた。<math>\mu s'</math> は脳の生理的成熟だけでなく、病的な脳の構築変化も反映している可能性がある。</p> <p>結論 近赤外線分光法は、新生児において後の認知機能障害につながる微細な脳損傷を、非侵襲的に発見するツールとなる可能性がある。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	吉岡 史隆
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Curved Planar Reformation for the Evaluation of Hydromyelia in Patients With Scoliosis Associated With Spinal Dysraphism.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年</p> <p>Spine, 43, E177-E184, 2018</p> <p>著者名</p> <p>Fumitaka Yoshioka, Shoko Shimokawa, Motofumi Koguchi, Hiroshi Ito, Atsushi Ogata, Kouhei Inoue, Yukinori Takase, Tatsuya Tanaka, Yukiko Nakahara, Jun Masuoka, Tatsuya Abe</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【研究の目的】二分脊椎の術後再係留症候群の検出は経過観察にあたり極めて重要である。水髄症の増大は画像診断にて検出しうる再係留徴候の一つとされる。しかし、側弯症を伴うと水髄症の画像評価は困難となる。本研究は画像再構成法である Curved Planar Reformation (CPR) を用い、側弯症患者の脊柱管内構造の視認性を向上し、水髄症の評価を可能とすることを目的とした。</p> <p>【方法】当科通院中の二分脊椎患者 107 名のうち、Cobb 角 20° 以上の側弯症を伴い、再構成に必要な MRI 画像が撮像された 11 例を対象とした。うち 5 例で水髄症を合併していた。3DCISS 画像を元に CPR 画像を作成した。水髄症合併例では、水髄症の長径、短径、水髄症部脊髓最大径の計測を 3 名の検者で行い、従来の T2 WI 矢状断での計測と比較し、検者間の誤差を検討した。</p> <p>【結果】全例で脊髓の直線化が可能で、水髄症合併例では、長径、短径、脊髓最大径が測定できた。特に長径の計測では、CPR 画像による計測は従来の T2 WI 矢状断での計測と比較し、有意に検者間の誤差が少なかった(SD: p=0.014, CV: p=0.013)。</p> <p>【考察】CPR 画像は解剖学的位置関係を喪失してしまう欠点を持つが、二分脊椎、特に側弯症を合併しやすい割髄症で正確な経時的変化を検出することが可能である。</p> <p>【結語】CPR 画像による解析は、二分脊椎に伴う側弯症患者の脊柱管内を可視化し、水髄症を合併した症例で経時的観察の精度向上に寄与した。このことにより再係留への適切な対応が可能となることが期待できる。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	永嶋 太
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>High-dose FXIII Administration Induces Effective Hemostasis for Trauma Associated Coagulopathy (TAC) both <i>in vitro</i> and in Rat Hemorrhagic Shock <i>in vivo</i> Models</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Trauma and Acute Care Surgery, Volume 85, Number 3, 588-597, 2018 [ IF : 3.403 ]</p> <p>著者名 Futoshi Nagashima, Satoshi Inoue, Hiroyuki Koami, Tooru Miike, Yuuichirou Sakamoto, Keita Kai</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>(目的)外傷性凝固障害(TAC)は重症外傷の致死的な合併症である。FXIII は凝固カスケードの最終段階で血栓を安定化させる。本研究は FXIII が TAC 状態を改善させるか <i>in vitro</i> 及び <i>in vivo</i> で評価することを目的とした。</p> <p>(方法) <i>in vitro</i> では t-PA による線溶亢進及び希釈性凝固障害を作成し、FXIII 投与の有無で、ROTEM 及び Sonoclot を使用し凝固反応を解析した。<i>in vivo</i> では TAC に類似した凝固障害をラット肝損傷モデルで作成した上で FXIII を投与し、生存時間、腹腔内出血量、凝固反応を解析した。</p> <p>(結果) <i>in vitro</i> 及び <i>in vivo</i> において FXIII は clot strength や線溶亢進、血小板機能を有意差をもって改善させた。<i>in vivo</i> では有意差をもって腹腔内出血量を減少させ、生存時間も延長させた(control vs FXIII: 108.9±11.4 vs 32.6±5.5(ml/kg), vs 26.0±8.8 vs 120(分), p&lt;0.001)。FXIII 投与に伴う副作用は病理学的には認めなかった。</p> <p>(考察) FXIII は線溶亢進に抵抗性を示すばかりでなく、血小板機能の血餅退縮能にも大きな影響を与え、出血量や生存時間も改善させたため、今後の TAC の新たな治療戦略になり得ると考えられた。</p> <p>(結論)高用量 FXIII 投与は TAC を伴った重症外傷の新たな治療法として期待される。</p>			
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	多胡 素子
<p>[ 論文題名 ]  <b>Efficacy and safety of sitagliptin in elderly patients with type 2 diabetes mellitus</b>          高齢 2 型糖尿病患者におけるシタグリプチンの効果と安全性</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Geriatrics &amp; Gerontology International, 18, 631-639, 2018</b></p> <p>著者名  <b>Motoko Tago, Jun-ichi Oyama, Yoshiko Sakamoto, Aya Shiraki, Fumi Uchida, Atsuko Chihara, Hideo Ikeda, Shigetaka Kuroki, Shigeki Gondo, Taketo Iwamoto, Yasufumi Uchida, Koichi Node</b></p> <p>[ 要 旨 ]  <b>【研究の目的】</b> 2 型糖尿病患者におけるシタグリプチンの効果と安全性を、年齢別に評価する。  <b>【方法】</b> 他施設共同の前向き試験である <b>The Saga Challenge Anti-Diabetes Observational Study for Sitagliptin (S-DOG)</b> 試験のデータを用いた。HbA1c 6.2%以上の 2 型糖尿病患者に、シタグリプチン 50-100mg を 12 ヶ月間投与し、年齢別 3 群 (65 歳未満、65 歳から 74 歳、75 歳以上) において、HbA1c などの臨床検査値の変化及び安全性について調べた。さらに 65 歳以上の患者においては、BMI 別 2 群 (BMI25 未満、BMI25 以上) において、HbA1c の変化を調べた。  <b>【結果】</b> 対象患者 188 人、年齢別 3 群全てにおいて HbA1c は有意に低下し、3 群間で HbA1c の変化に有意な差はなかった (<math>P = 0.324</math>)。65 歳以上の患者群では、BMI 別の 2 群ともに HbA1c は有意に低下し、2 群間で HbA1c の変化に有意な差はなかった (<math>P = 0.943</math>)。有害事象は 65 歳以上の患者の 10.3%に認め、年齢別 3 群で比較して発症に差はなかった (<math>P = 0.724</math>)。  <b>【考察】</b> 高齢者は HbA1c の基礎値が低く、慢性腎臓病が多い。特に 75 歳以上の患者群においては、シタグリプチンの通常用量投与により、有意な有害事象の増加や eGFR の低下はなく、若年者と同様に有意に HbA1c を低下させた。また高齢者においては、シタグリプチンの投与は BMI 値にかかわらず HbA1c を低下させた。以上より、高齢者におけるシタグリプチンの効果と安全性は高いと考えられる。  <b>【結論】</b> シタグリプチンは BMI に関わらず、有効性および安全性が高く、高齢 2 型糖尿病患者に有用と考えられる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	永田 晃子
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Risks and benefits of sodium polystyrene sulfonate for hyperkalemia in patients on maintenance hemodialysis</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Drugs in R&amp;D, <a href="https://doi.org/10.1007/s40268-018-0244-x">https://doi.org/10.1007/s40268-018-0244-x</a>, 2018</b></p> <p>著者名  Teruko Nakamura, Taisei Fujisaki, Motoaki Miyazono, Maki Yoshihara, Hiroshi Jinnouchi, Kenichi Fukunari, Yuki Awanami, Yuki Ikeda, Kohei Hashimoto, Masatora Yamasaki, Yasunori Nonaka, Makoto Fukuda, Tomoya Kishi, Yuji Ikeda</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> 高 K 血症は透析患者の致死的不整脈の原因となる。現在、高 K 血症治療に使用できる内服薬は、イオン交換樹脂のポリスチレンスルホン酸 Na(Na-resin)とポリスチレンスルホン酸 Ca (Ca-resin)の 2 剤である。Na-resin と Ca-resin の治療効果の比較と、Na-resin の Na 負荷が体液貯留に影響しているかを検討した。</p> <p><b>【方法】</b> 対象は当院で維持透析をしている患者で、Ca-resin から Na-resin に切り替えた 11 例、Na-resin を新規に開始した 29 例。Na-resin 開始前後それぞれ 4 週間の血液データ {K, Na, Ca, Cl, P, 推定 <math>\text{HCO}_3^-</math> (<math>\text{eHCO}_3^- = \text{Na} - \text{Cl} - \text{P} - 7</math>)}、血圧(拡張期、収縮期)、透析間の体重増加率(%)を比較検討した。</p> <p><b>【結果】</b> 血清 K の平均は、切り替え群では <math>5.5 \pm 0.6</math> から <math>4.9 \pm 0.6 \text{mEq/L}</math> に、新規開始群では <math>5.9 \pm 0.4</math> から <math>4.7 \pm 0.6 \text{mEq/L}</math> に有意に低下した。切り替え群では血圧、体重増加率または血清 Na に変化は認められなかった。新規開始群の血清 Na は <math>137.4 \pm 2.3</math> から <math>139.0 \pm 2.5 \text{mEq/L}</math> まで有意に上昇したが、正常範囲内にとどまった。</p> <p><b>【考察】</b> ポリスチレンスルホン酸樹脂に対するイオン親和性は <math>\text{Na} &lt; \text{K} &lt; \text{Ca}</math> なので、Na-resin のほうが Ca-resin より K 吸着力が強く、実際にそのような結果であった。また、Na 負荷があれば高 Na 血症回避のため飲水量が増え、体重増加率や血圧に影響することを予想していた。しかし、切り替え群、新規開始群のいずれも影響を受けていなかった。これは、Na-resin 内服量が切り替え群で平均 <math>8.2 \pm 2.6 \text{g/日}</math>、新規開始群で平均 <math>8.7 \pm 5.5 \text{g/日}</math> と少なかったためと考えられた。</p> <p><b>【結論】</b> 高 K の治療として Na-resin を <math>10 \text{g/日}</math> 程度の低用量で使用することはメリットがある。しかし、より高用量のイオン交換樹脂が必要な場合は、Na や Ca 負荷のデメリットも考慮して薬剤選択をする必要がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	坂本 佳子
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Effects of sitagliptin beyond glycaemic control: focus on quality of life. DPP-4 阻害薬の血糖コントロールと QOL に対する効果の検討.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Cardiovascular Diabetology. 12:35, 1-9, 2013.</p> <p>著者名 坂本佳子、尾山純一、池田秀夫、黒木茂高、権藤重喜、岩本剛人、内田康文、兒玉和久、樋渡敦、下村光洋、田口功、井上晃男、野出孝一、S-DOG 研究グループ.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】2 型糖尿病患者における DPP-4 阻害薬の血糖と QOL に対する効果と安全性を評価した。【方法】食事療法、運動療法または従来の糖尿病治療薬の投与でも HbA1c が 6.2 % 以上の 20 歳以上の 2 型糖尿病患者を対象とした。多施設の単群プロトコールでシタグリプチン 50mg/日の新規または既処方薬への追加投与を行い、可能な限り 100mg/日まで増量した。12 ヶ月の観察後、HbA1c、空腹時血糖、血圧、体重、BMI、脂質、1,5-AG、HOMA-β、HOMA-IR、QOL の変化を評価した。QOL 評価には EQ-5D、EQ-VAS、ピッツバーグ睡眠質問票(PSQI)、糖尿病症状スコア(DSS)を用いた。【結果】登録患者 207 例のうち、投与中止等の 19 例を除く 188 例を有効性解析の対象とした。有効性解析対象例において、HbA1c と空腹時血糖は有意に低下し(HbA1c: 投与前 7.65 % ± 1.32 %、12 ヶ月後 7.05 % ± 1.10 %、<math>p &lt; 0.001</math>)、血圧や中性脂肪、総コレステロール値においても有意に低下した。QOL 評価では PSQI と糖尿病症状スコアにおいて有意な低下が認められた。PSQI と HbA1c の低下度に相関は認められず、その効果は一部血糖非依存性であることが示唆された。低血糖発作は 1 例に認められた。【考察】本研究で DPP-4 阻害薬による睡眠の質の改善が示されたが、GLP-1 の中枢に対する作用か否かは明らかではない。【結論】2 型糖尿病患者への DPP-4 阻害薬投与により、血糖や血圧、脂質、QOL の改善が認められた。本研究において糖尿病患者における DPP-4 阻害薬による睡眠の質の改善作用が初めて明らかにされた。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	相原秀俊
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Visual Impairment, Partially Dependent ADL and Extremely Old Age Could be Predictors for Severe Fall Injuries in Acute Care Settings</p> <p>視力障害、軽度 ADL 低下と高齢は入院中の重症転倒の予測因子である</p> <p>雑誌名、巻（号のみの雑誌は号）、頁一頁、発行西暦年 International Journal of Gerontology, 12, 175-179, 2018</p> <p>著者名 Hidetoshi Aihara, Masaki Tago, Toru Oishi, Naoko E. Katsuki, Shu-ichi Yamashita</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> 本研究は、何らかの治療を要する程度の院内転倒外傷の関連因子を明らかにすることを目的とする。</p> <p><b>【方法】</b> 2012年4月-2015年1月に祐愛会織田病院に入院した成人患者のうち、全ての院内転倒患者371名について後ろ向きに調査した。性別、入院時の年齢、眠剤内服の有無、脳梗塞後遺症の有無、転倒転落の経験の有無、視力障害の有無、パーキンソン症候群の有無、日常生活動作、日常生活自立度（寝たきり度/認知度）、車椅子使用の有無、転倒時間、転倒理由、インシデントレベル（転倒による障害の重症度）を、電子カルテより収集した。すべての院内転倒患者を治療不要群（インシデントレベル2以下）と要治療群（インシデントレベル3a以上）に分類し解析した。</p> <p><b>【結果】</b> 対象群の年齢中央値は83歳（24-104歳）、173例（53%）が男性であった。インシデントレベル1が188例（53%）、2が124例（35%）、3が12例（13%）であった。単変量解析の結果、要治療群で視力障害あり、排泄自立、寝たきり度A、85歳以上の割合が有意に高く、認知度4の割合が有意に低かった。（すべて <math>p &lt; 0.05</math>）多変量解析では、視力障害あり、寝たきり度A、85歳以上が有意に治療を要する程度の院内転倒外傷に関連していた。（すべて <math>p &lt; 0.05</math>）</p> <p><b>【結論】</b> 視力障害、寝たきり度A、85歳以上は、治療が必要な転倒と関連する可能性がある。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	三池 徹
<p>[ 論文題名 ] Effects of hyperbaric exposure on thrombus formation.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Undersea and Hyperbaric Medicine, Volume 43, number 3, 233-8, 2016</p> <p>著者名 <u>Miike T</u>, Sakamoto Y, Sakurai R, Ohta M, Goto A, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Koami H, Yamada KC, Fujita R, Nagashima F, Iwamura T, Inoue S.</p> <p>[ 要 旨 ] (目的) 古くから行われている高気圧酸素治療が、血小板凝集能を亢進させるという報告が相次ぎ血栓性イベントを増加させる可能性も示唆されている。しかし高気圧酸素治療が血栓性イベントを増加させるという報告は認めず、臨床的経験とも合致しない。我々はより生体に近い環境で血栓形成能を測定できる T-TAS®を使用し血栓形成能の変化を解析した。 (方法) 健常ボランティア (平均 28.8 歳) 10 人から検体を採取し、温度管理をした試験管内で一定の圧をかけた加圧群とコントロールとしての非加圧群を作成した。暴露群とコントロール群の検体を加圧直後・加圧後 20 分・加圧後 40 分のタイミングで T-TAS®を使用し血栓形成能を測定した。 (結果) 暴露群は血栓閉塞開始時間が有意差を持って延長し血栓形成能は低下していた。また時間経過と共に血栓形成能は回復しコントロール群に近づいていった。 (考察) これまでの報告では血小板凝集能は亢進するという見解が一般的であったが、生体内での血栓形成能に及ぼす因子は、血小板粘着能や活性化なども含めた複合的要因である。T-TAS®はそれらの複合的要因を含めた、より生体に近い環境で血栓形成過程を捉えることが出来るため、過去の報告と異なる結果となったと考えられた。 (結論) より生体に近い環境で血栓形成能を測定することが出来る T-TAS®を使用することで、高気圧環境に暴露した検体の血栓形成能は低下することが解明された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。